

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：32601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24700908

研究課題名(和文) 支援型教師教育モデルにおける教師教育者の役割に関する研究

研究課題名(英文) A study of the role of Teacher Educators on Realistic Teacher Education

研究代表者

坂田 哲人(SAKATA, TETSUHIITO)

青山学院大学・情報メディアセンター・助教

研究者番号：70571884

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：昨今さまざまな制度変更が実施されている教師教育に関連する分野ではあるが、その教師教育を実質的に指導する役割である教師教育者に関する議論は依然として置き去りのままである。特に、「学び続ける教師」を育成するためには、実践から学びとる力量を形成することが必須で、教師教育者は省察を中心としたファシリテータの役割を果たすことが求められる。本研究では、このことについての国内外の動向を収集しまとめるとともに、教師教育者のファシリテーションの能力の育成について、ワークショップ等を通じて実際に取り組みその成果と、今後の研究課題についてまとめた。

研究成果の概要(英文)：Nowadays, various institutional changes concerning teacher education have been implemented. However the discussion about teacher educators who are substantially supervising role in teacher education is still remain behind. In particular, in order to realize the ability for continuous learning is essential to form a competence of learning from practice. Therefore, the teacher educators is required to play the role of facilitators with a focus on reflection. In this study, as well as put together to collect domestic and international trends in this regard, for the development of the ability of the facilitation of teacher educators, and the results actually efforts through workshops, etc., were summarized for future research.

研究分野：人材開発・教師教育

キーワード：教師教育 教師教育者 リフレクション 経験学習 教員養成 省察 専門性開発

1. 研究開始当初の背景

教員の資質・能力に関する議論が高まり、教員免許制度や教員養成制度のあり方、あるいは現職教員の専門性開発（以降総じて「教師教育」という）にかかる様々な制度変革が行われている。例えば、教員免許更新制の制定や、教職大学院の設置、養成課程における教職実践演習の設置や、あるいは養成課程の延長に関する議論などは、その制度改革の一環として行われてきたものである。

この教員の資質能力に関する議論は、日本のみならず諸外国においても盛んに行われており、同様に教師教育に関する制度変更も行われている。つまり、この教師教育に関する問題は世界中における重要な諸課題といっても過言ではない。

そして上に挙げた数々の教師教育に関する制度改革を実質的なものにするために、「教師教育」を対象とした教育課程や教育方法の設計、教員の資質能力の定義や明文化（スタンダードやコンピテンシーと呼ばれている）、現職教員に向けての育成制度（例えば研修や OJT 制度）の整備、教育実習の充実などが検討され、実現に向けて取り組まれてきた。

しかしながら、このような教師教育をテーマにした種々の検討のうち、日本においては諸外国と比して圧倒的に議論が立ち遅れていることのうちのひとつとして、「教師教育者（Teacher Educators）」に関する検討を挙げることができる。

教師教育者とは、教師教育に携わる指導的な役割を担うものの総称であり、養成課程においては主に養成校、つまり日本においては大学の教員であり、現職教員の専門性開発においては、学校における指導教諭や、教育委員会の指導主事、あるいは学校管理職などがこの任にあたる。他にも、外部の教員研修機関における指導的な役割なども含め、幅広く定義されている。

そして、教師教育者に関する議論においては、教師教育の場面にあたりその果たすべき役割やどのようなものか、あるいは教師教育者として求められる資質や能力についてはどのようなものか、あるいは、教師教育者の専門性をどのように開発していくかということなどがテーマとして考えられる。

欧米諸国においては、たとえば米国教師教育者協会 ATE (Association of Teacher Educators) や、欧州教師教育学会 ATEE (Association of Teacher Education in Europe) の『教師教育者の専門性開発に関する課題研究部会』（Professional Development of Teacher Educators）などで盛んな検討が行われており、様々な調査研究の結果が共有されているほか、この結果を受け教師教育者のあり方や資質能力について言及するような政策レベルでの議論も喚起されている。

それに比べ日本においては、これまでに述

べてきたように教師教育に関する議論はより盛んになってきているものの、一方で、教師教育者に関する議論は依然として少ないままの状況にある。

2. 研究の目的

本研究の主題として、「支援型教師教育モデル」と掲げているのは、教師教育者に関する議論をはじめにあたって、これまでの教師教育におけるパラダイムと一線を画したアプローチとしたいという考えからである。これまでに日本における教師教育者に関する議論が少なかった理由として日本における教師教育モデルの中に、教師教育者が重要な役割として位置付けられてこなかったという点が挙げられよう。そのことから、本研究では、教師教育者に関する議論と合わせて、新しい教師教育モデルを構想することも視野に入れて検討を進めてきた。

新しい教師教育モデルを構想する背景には、近年日本における教師のあり方として「学び続ける教師」がキーワードとされていることがある。学び続けるための力量を教師に形成していくためには、これまでのいわゆる知識技術の伝搬型ではなく、教師自身が主体的に自己開発に取り組み、そして教師教育者に求められるのはその取り組みを後方や側方から支援することであると言える。

具体的に述べると、教員の専門性、特に学び続けるちからを育成（開発）していくためには、教師自身が経験的に学習を進められるちからを身につける必要があると言い換えることができる。経験的に学習をするという点からは、Argyris and Schon(1967)、Kolb(1984)、松尾(2006)などの議論を取り上げることができる。Argyris and Schon の議論ではこの学習過程を Double Loop Learning と称し、Kolb や 松尾は「経験学習モデル (Experimental Learning Model)」としてその学習のプロセスを説明しようと試みている。そして、このいずれの議論においても通底する主要な概念・行為として「リフレクション（省察）：以下リフレクションと記す」を通じて自身の経験や実践を実質化していくことを求める点があげられる。

その上で、この考え方を教師教育の場面にあてはめ、かつ、このプロセスの実質化を教師教育者がどのように担保していくかが教師教育者の役割と専門性を考えていくにあたり重要な視点となる。

具体的に考えるならば、次のような構図が考えられよう。教師は、経験学習のモデルに沿って、自身の経験や実践を取り上げ、これを今後の実践に繋げ、ひいては自分の専門性として獲得できるようにリフレクションを通じてそれを体得していく。その際に、教師教育者に求められる役割は、そのリフレクションを効果的に行い、その成果を確認し、必要に応じて軌道を修正し、追加のアドバイスなどを行うことである。つまり、この学習活

動における主体はあくまでも学習者である教員自身にあり、教師教育者はその学習活動が円滑におこなわれるようにサポートする役割が求められる。

これまでの教師教育モデルは、その多くが到達すべき目標を、理論や卓越した実践（教師）モデルを目標に、それを学ぶという方法が主流であったといえる。いわば、理論から実践へつなぐアプローチである。一方で、この経験学習を中心的な概念においたモデルでは、先に目標とするモデルがあるわけではなく、自身の経験を中心として、そこから自分自身の教師像を作っていくというアプローチである。

上述の教師教育者の役割と合わせ、この教師教育のアプローチを「支援型教師教育モデル」と称し、この教師教育モデルの実践についての構想と、教師教育者の役割、専門性について議論を進めていくことを本研究の目的とした。

研究期間の前半においては、支援型教師教育者の役割とその専門性を明らかにするために、主に理論研究や事例調査を中心に検討を行い、支援型教師教育モデルの構想と、それに基づく教師教育者の役割と専門性の定義を試みた。研究期間の後半においては、日本において教師教育者の専門性開発を具体的にどのように進めるべきかを言うことを主眼に、教師教育者に向けての専門性開発プログラムを構想し、実践した上で、その内容に関してレビューを実施する研究を行った。具体的な内容および結果については次項以降に述べる通りである。

3. 研究の方法

支援型教師教育者モデルを構想するために、主に2つの研究に取り組んだ。一つは、海外を中心とした事例研究である。

その後、日本において近似する課題を有する他の研究プロジェクトと合同で、日本の学校現場における教師教育者の専門性と役割に関して、その現状の認識と課題を明らかにするために全国規模の調査に参加・実施した。

上記の活動を通じて、日本において支援型教師教育モデルを展開していくためには教師教育者自身の専門性開発に関する議論並びに、その機会が不足していることも明らかとなり、研究期間の後半においては、こうした現状を共有しつつ、教師教育者のための専門性開発のためのプログラムを開発し、日本各地の教師教育者へ協力を依頼し、教師教育者の専門性開発のためのワークショップを、およそ1年間にわたって開催した。その具体的な実践内容について教師教育者自身からそのレビューを受けプログラムに関する評価を実施した。

一連のワークショップのうち、2014年10月から11月にかけて実施した分については、オランダよりKorthagen氏を本研究プロジェクトの一環として招聘し、世界各地で実践の

指導が行われているリアリスティックアプローチの方法について、直接的に学習することができる機会をもうけ、合わせてレビューを行った。

4. 研究成果

上述してきたように、日本における支援型教師教育と、教師教育者の役割と専門性、ならびにその開発という研究の観点から研究活動を推進し、3年間の研究期間を通じて以下のような成果が得られた。

まず、教員養成課程においては、教師教育者が経験学習のファシリテーター（支援者）として教師教育に携わるというモデルは、オランダの教員養成校の実践に見いだすことができた。オランダは実習期間が長いことでよく知られた教員養成を行っているが、そのなかでも、現場実習を主体に事前のテーマ設定から、事後の振り返りを一連の学習機会としてリフレクションの機会を設けている点であった。

この実践は、本研究における支援型教師教育を具現化している一つのモデルとなる有用な実践例であったといえ、研究期間を通じて本モデルの日本への応用について検討を進めることとなった。

このような実践が、例えば他国や、日本においてどのような広がりを持つ可能性があるかについて、次に調査を実施した。米国オレゴン州の南カリフォルニア大学では、2007年より、Korthagen氏の指導を受け、リアリスティックアプローチの教師教育実践を行っている。

Korthagenは、教師教育における理論と実践を結びつける考え方を提唱した、教師教育研究・実践の第一人者であるが、氏が提唱した内容はリアリスティックアプローチとして世界各地に紹介されている。

リアリスティックアプローチとは、先述の経験学習モデルを参考に、理論と実践を架橋する教師教育モデルとしてKorthagenが2001年の“Linking Practice and Theory”という著書で詳細に説明した教師教育モデルであるここで紹介されているALACTモデルは、上述の経験学習サイクルモデルと同様に、リフレクションを中心とした、自身の教育実践をベースに専門性を獲得していく考え方を提唱したものであり、現在においては日本においても広く共有されているモデルの1つである。

その考え方に共鳴した南オレゴン大学の教師教育者2名が、自身の大学の養成課程に導入すべく自身での授業現場での実践や、FD研修会などにKorthagen氏を招聘するなど精力的に取り組んだ。筆者は、この両名を含めた教師教育者への取材と、授業実践の観察を行ったが、多くの教員が自分自身に合わせた形でこのリアリスティックアプローチを取り入れた授業実践を行い、結果的に多様な教育実践が展開されているように窺えた。取

材当時で導入より 6 年間で経過していたが、当初に取り組んだ 2 名を中心とした緩やかな相互に学べるコミュニティが形成され、それが機能しているように見受けられた。

次に、日本においてこのような教師教育の実践が可能なのかどうかは次の焦点となった。並行して実施した、他の研究プロジェクトと共同して行った日本の学校現場における教師教育者に関する質問紙調査の結果が得られた。

この質問紙では学校における教師教育者、特に教育実習や、若手の教員を指導する教師教育者に関する位置付けと役割について調査をした結果、これまでに述べてきた従来の教師教育モデルを裏付けるように「理論から実践へのアプローチ、あるいは卓越した教師像からのアプローチ」の対する考え方が依然として根強く、冒頭にあげたような学び続ける教師像や、あるいはキーワードとしてあげられているリフレクションに関する認識や取り組みはわずかであるという結果となった。

しかしながら、これらのことに取り組み、教師教育者の専門開発を今後取り組んでいかなければならないということについては、他よりは相対的に優先度は低いものの、しかし高いスコアでそのニーズも合わせて示された。

このことを受けて、研究期間の後半では、先行的に得られたオランダと南オレゴン大学の実践事例を参考にしながら教師教育者の専門性開発をテーマに調査研究活動に取り組んだ。

その際に重視された点は、国内においてこのような教師教育の実践を行う際に、リフレクションをどのように効果的に促すかということである。

リフレクションや、あるいは上述した ALACT モデルのプロセスを日本の教師教育者が効果的に促していくことができるようになるためには、教師教育者自身にファシリテーターとして能力が求められる。加えて、オランダや南カリフォルニア大学における実践と、日本における教師教育、とくに教員養成課程における教師教育の実践については、諸外国と比して実習期間の長さも異なり、また教師教育者一人あたりに対応しなければならない学生数も大きく異なる。

個々に（経験）学習の状況が異なる中できめ細やかな支援が求められる教師教育実践において、どのように効果的かつ効率的な実践方法が提供されるかが日本における教師教育者にとってのニーズとして表出された。

さらには、学校内や、養成校（大学）の中で体系的、あるいは組織だって実践していくことについては、他の教師教育者との連携や、現在運営されている課程（授業）との結びつけが難しいなどの、展開上の困難な側面も合わせて指摘された。

これまで述べてきたように、支援型教師教

育の日本における実践はまだほとんど例がない状況であり、かつ、現状においては、依然として教師教育者個々人の自身の創意工夫、言い換えれば、自分の手の届く範囲内で実践をしなければならない状況にある。そのような中で、教師教育者としての専門性を獲得していくためには、組織（学校や機関）を超えた相互に学びあえるコミュニティづくりも合わせて不可欠であろうという考えが生まれる。

このようなことを背景に、2013 年度後半から 2014 年度にかけては、教師教育者が集い、相互に情報や意見交換を行えるためのラーニングコミュニティを作り、全国の教師教育者に協力を要請しつつコミュニティへの参加を促した。

研究会を開催する際には毎回およそ 20 名ほどの教師教育者が集い、リフレクションを中心とした教師教育方法の開発に取り組んだ。2014 年 10 月から 11 月にかけては、リアリスティックアプローチの提唱者である Korthagen 氏を本研究プロジェクトによって招聘し、この参加者に対して具体的な方法を提供する傍らで、改めてリアリスティックアプローチによる教師教育のあり方と教師教育者の役割について意見交換と確認を行った。

この活動を通じて、多く指摘がなされたのは、数々の方法論を、自身の教師教育実践にどのように適応させていくかという具体的な方策がこれまでもたらされてこなかったことである。

日本の実践の特性や、教員自身のリフレクションの特性、特に改善的志向が強い専門性開発の考え方と、ポジティブアプローチを主体とするリフレクションの特性とが合わないことも多く、リフレクションを促す行為を躊躇せざるを得ない場面に多く直面していることも明らかとなった。

今後は、これらの教師教育実践の紹介や単一的な実践にとどまらず、継続的かつ、日本の特性に合わせた実践を積み重ねつつ、その内容を実践知として蓄積していくことが望まれ、今後の研究課題とも言える。本研究は、そのための基盤作りとしての役割を果たしたといえるだろう。

最後に、本研究のもう一つの発展の方向性そして今後の研究課題として、教師教育者が組織を超えて他の組織や機関に対して貢献をしていくという考えについて述べておく。具体的には、養成校（大学）の教師教育者が、たとえば学校組織や、教育センターなどに出向き、養成校で得られた教師教育実践の知見を提供したり、あるいは学校現場における教師教育者が養成校などに教師教育実践の知見を提供するなどの広い意味での教師教育者の実践の広がりを捉え、教師教育者の今後のあり方の一つを示すものとして検討していく必要があるだろう。

今後教育実習のさらなる実質化や、教職大

学院の拡張など、養成現場と、学校現場のさらなる結びつき、ひいては相互が強く連携した形での教員の専門性開発に関する構想がなされる可能性が高いと思われる。

これは日本のみならず、ここまで取り上げてきたオランダにおいてももちろんであるし、他国も含め国際的な動向であるといえる。筆者らは、これまでに小学校における研究授業（研究協議会）に教師教育者がどのように貢献しているかについて調査を行い、組織外からの新しい視点や知見の提供など、ある一定の役割や効果を指摘することができたが、今後はこの議論をさらに発展させ、教師教育者と中心概念にした新しい教師教育のあり方に関する検討が求められているといえよう。

5. 主な発表論文等 〔雑誌論文〕(計8件)

坂田哲人, 「教育実習生を指導する5段階の手順」の实践とその課題, 武蔵大学総合研究所紀要第24号, pp3-6, 2015年6月, 査読なし

坂田哲人・村井尚子, 「『教育の基礎理論に関する科目』のリアリスティックな授業実践」, 『青山インフォメーション・サイエンス』Vol.42 pp.4-9, 2015年3月, 査読あり

杉本卓・坂田哲人ほか6名, 「教職科目『教育方法の研究(中等教育)』における電子黒板・デジタル教科書活用の試み」, 『青山学院大学教育人間科学部紀要』第6号 pp.51-64, 2015年3月, 査読なし

坂田哲人, 「リアリスティック教師教育の展開」, 武蔵大学総合研究所紀要第23号, pp3-12, 2014年6月, 査読なし

中田正弘・伏木久始・坂田哲人・鞍馬裕美, 「教育実習生及び初任者・若手教員の指導を担当する教員に関する現状と課題」, 『信州大学教育学部研究論集』第7号, pp.31-46, 2014年3月, 査読あり

坂田哲人, 「オランダの教員養成の取り組みと地域学校連合の動向が教員採用に与える影響」, 東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター共同研究プロジェクト報告書, pp.67-74, 2014年3月, 査読なし

坂田哲人, 「PLC (Professional Learning Community) に関する議論の整理」, 『青山インフォメーション・サイエンス』Vol.41 pp.21-24, 査読なし

坂田哲人, 「オランダの教員養成学校の事例から見る教育実習運営上の課題」, 東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター研究年報 Vol.12, p21-29, 2013年3月, 査読なし

〔学会発表〕(計9件)

Tetsuhito Sakata, Masahiro Nakada, Daisuke Choshi and Takehiro Wakimoto, "Professional development of teachers through Lesson Study, and its implication on school organization in cooperation with external teacher educators", The Nordic Educational Research Association 43rd Annual Conference, Gothenburg, Sweden, 2015年3月5日

坂田哲人・井上真理子・今井豊彦・加藤翼, 「成長段階と役割から見た保育士の専門性開発の現状と課題」, 人材育成学会第12回研究大会, 2014年12月7日, 明治大学

坂田哲人・中田正弘・脇本健弘・町支大祐, 「学習する学校作りに果たす教師教育研究者の役割 校内授業研究を基礎として」, 日本教師教育学会第24回年次研究発表大会, 2014年9月28日, 玉川大学

Tetsuhito Sakata and Masahiro Nakada, "A study of the role and expertise of mentor teachers to supervise novice teachers and student teachers", The Nordic Educational Research Association 42nd Annual Conference, Lillehammer, Norway, 2014年3月7日

中田正弘・伏木久始・坂田哲人・鞍馬裕美, 「教育実習生及び初任者・若手教員の指導を担当する教員に関する現状と課題」, 日本教師教育学会第23回年次研究大会, 2013年9月16日, 佛教大学

Tetsuhito Sakata and Masahiro Nakada, A study of the relation between education policy and teacher education system - from a perspective of Japanese trends, The Nordic Educational Research Association 41st Annual Conference, Reykjavik, Iceland, 2013年3月8日

Tetsuhito Sakata and Hiroshi Yano, International Comparative Research on the Study of Teacher Educators,

The Third East Asian International
Conference of Teacher Education ,
Shanghai, China, 2012 年 12 月 10 日

坂田哲人・矢野博之,『省察をベースに
した教員養成プログラムにおける教師
教育者の役割と専門性』日本教師教育学
会第 22 回年次研究大会 ,2012 年 9 月 9
日, 東洋大学

中田正弘・伏木久始・鞍馬裕美・坂田哲
人,「教師教育者の位置づけと役割 オ
ランダ・デンマーク・アメリカとの比較
を通じて 」日本教師教育学会第 22 回
年次研究大会, 2012 年 9 月 9 日, 東洋
大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坂田 哲人 (SAKATA TETSUHITO)
青山学院大学・附置情報メディアセンター・
助教

研究者番号 : 70571884